

# 子どもたちの声 聞いて

## 親子が別れる時

### 離婚を考える

「結婚なんてばかばかしいと思う」「普通の家にあこがれます」。パソコンの画面上に浮かぶ、傷口がふさがらない子どもたちの声。インターネットの会員制交流サイト上に「親の離婚を経験した子ども」のコミュニティを作った横浜市の会社員、中田和夫さん(39)も、親の離婚にほんろうされた。

中田さんは物心ついた時、父方の実家で、祖父母に育てられていた。母親は出産後間もなく亡くなり、父親は仕事が忙しい。祖父母の説明を疑うこともなかった。父親は連休や正月には帰ってきたが、ほとんど口を

きかなかった。高校生の時。「お母さんはどんな人？」と聞くと、決まってはぐらかす祖母を質問攻めにした。「あの女はお前がじまで捨てた」。返ってきたのは、衝撃の言葉。離婚を長い間隠されていたことに、怒りを感じた。

## 両親とのかかわり 成長に好影響 ■ 意思の見極め 慎重に

「人が怖い」。成長するにつれ、人間関係でつらさを感じるようになった。大学卒業後、就職した会社を1カ月で退職。アルバイトも続かない。カウンセリングに通ううち、自分を肯定するのが苦手で、それが成育歴からきているかもしれない、と思い始めた。

「母が生きているうちに会って、経緯を聞きたい」。戸籍を調べて手紙を出し、26歳で初めて母と会った。初秋の神奈川県・小田原駅。感激より不思議な感覚だった。無口な父に悩んだこと、離婚の時に祖母から「子は置いていけ。二度と会う

な」と言われたこと、一目会いたかったこと……。話を聞くうち、少し気持ちの整理がついた気がした。

母との交流や、自分のつらい気持ちを話す会に参加したりして、徐々に自信を回復。08年に就職し、1人暮らしも始めた。中田さんは言う。「事実を聞き、母とかかわりがあれば、これほど悩まなかったかもしれない。幼くて親の離婚に声を出せない子たちのために『自分はどうだった』と発信し続けたい」

中田さんのように、離婚家庭の子どもの声を発信する取り組みは広がっている。NPO法人「Wink」(東京都)の新川明日菜さん(22)らは「アンファン宣言」(<http://enfant-wink.com/top>)とSNSサイトを開設し、離婚家庭の子どもの気持ちを掲載し

ている。新川さん自身も親の離婚を経験し、15歳で父に初めて会った。「会いたいとも何とも思っていないのに、周りから『会いたいよね?』と言われるのが苦痛だった。結果的には会って良かったけれど、時間が必要な人もいる。親の思い込みではない『本当の子どもの声』を聞いてほしいと訴える。

離婚後も子どもが両親と継続的なかかわりを持つことは、子の成長のためによい。この認識は欧米だけでなく、日本の裁判所でもいまや「常識」だ。離婚後の子どもの問題に詳しい神戸親和女子大の棚瀬一代教授(臨床心理学)は「別居する親と良好な関係が続く方が、子どもの立ち直りが早い。自分は何者かと悩む時期にも、親とのかかわりが意味を持つ」と説明する。

だが子の意思については棚瀬教授は「慎重に見極めるべきだ」と指摘する。虐待があるなど離婚前からの親子関係が原因で子どもが面会を拒否するケースに対し、以前は仲が良かったのに、親が別居や離婚した後、子が根拠なく激しい拒否感を示す時は要注意という。

これは「片親疎外」と説明され、同居する親が別居する親を批判した立命館大の二宮周平教授(家族法)は「別居している親とどこで遊びたいか、参観日には来てほしいかなど、意見が言える子もいる。日本でも子どもが意見表明できる仕組みをつくるべきだ」と訴える。

面会交流が家裁で争われた場合、必要があれば調査官が子の意思を心理テストなどを用いて確認するが、十分に意思を酌むことへの限界も指摘されている。ドイツでは、必ず子どもの意見が聞かれ、主張できない子には代わりに意見を述べる代弁人がつく制度もある。